

芸術家 吉川静子と

スイス人グラフィックデザイナー・ミュラー＝ブロックマンの初の大回顧展 開催

# Space In-Between : 吉川静子とヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン

2024年12月21日（土）～2025年3月2日（日）／大阪中之島美術館 5階展示室



## 《 報道関係者お問い合わせ先 》

「Space In-Between : 吉川静子とヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン」PR事務局（TMオフィス内）  
担当：馬場・永井・西坂

TEL : 090-6065-0063 (馬場) 090-5667-3041 (永井)

テレフォンセンター : 050-1807-2919 FAX : 06-6231-4440 E-MAIL : [SIB@tm-office.co.jp](mailto:SIB@tm-office.co.jp)

## 開催趣旨

よしかわしずこ

吉川静子 (1934-2019)とヨゼフ・ミュラー=ブロックマン (1914-1996) は、それぞれ進むべく道を開拓しながら、夫婦として創造的な生涯を共にしました。吉川は人生の大半をスイスで過ごし、1960年代・70年代に抽象絵画と彫刻により女性芸術家として注目されます。一方ミュラー=ブロックマンは、洗練されたタイポグラフィと「グリッドシステム」によるグラフィックデザインで、1950年代以降スイスを代表するデザイナーとして国際的に知られるようになりました。

本展では、吉川の芸術性、ミュラー=ブロックマンの構成的デザインを表現した作品を展示。分野を超えた二人の活動の軌跡を堪能できる大回顧展です。



チューリッヒにて 1965年頃、

Copyright and courtesy of the Shizuko Yoshikawa and Josef Müller-Brockmann Foundation

## 見どころ

1. スイスを代表する国際的なタイポグラファーでありグラフィックデザイナーのヨゼフ・ミュラー=ブロックマン(1914-1996)と、そのパートナーであり芸術家の吉川静子(1934-2019)の没後初、世界初の大規模な二人展
2. デザインとアートの豊かな融合、スイスと日本の唯一無二の交流の実例となる展示内容
3. スイスから約130点の吉川静子作品が来日。日本初お披露目
4. ヨゼフ・ミュラー=ブロックマン作の約60点のグラフィック作品を展示。「グリッドシステム」の原点、『ノイエ・グラフィック』誌も展示

## 吉川静子、ヨゼフ・ミュラー=ブロックマンについて

### 吉川静子 (1934-2019)

デザイナーから芸術家へと転身しながら、教養ある芯の強い女性として生涯の大半をスイスで送った日本人。ヨゼフ・ミュラー=ブロックマンと結婚し、チューリッヒを拠点に芸術活動を行った。J・M=ブロックマン没後、大きな喪失感の中、太陽をテーマとした絵画を描き始め、晩年はシルクロードをテーマとした作品を制作し、自身の芸術をさらに発展させ、正統的「モダン」の形式化した伝統から逸脱していった。絵画、立体絵画、版画作品の大半はチューリッヒにある。

### ヨゼフ・ミュラー=ブロックマン (1914-1996)

スイスを代表する国際的なグラフィックデザイナー、タイポグラファー。1960年代-80年代にかけて数度にわたり来日。亀倉雄策など日本のデザイナーと親交を深める一方、デザイン学校や美術大学で教鞭をとり日本のデザイン教育にも貢献した。紙面における文字組みと構成の方法論についてまとめ命名した「グリッドシステム」は、デザイン史上の金字塔というべき理論として今日まで大きな影響を与え続けている。優れた教育者、ポスター・デザイナーとして知られると同時に、どのような人にも優しい人柄だったことが今日まで語り継がれている。



吉川静子とヨゼフ・ミュラー=ブロックマン 1985年頃  
Copyright and courtesy of the Shizuko Yoshikawa and Josef Müller-Brockmann Foundation

## 第1章 Space In-Between : 吉川静子

### 1 初期作品 「シークエンス」と「トランスフォーメーション」

デザインからアートへ舵を切った吉川がアーティストとして活動を始めた当初の作品群を紹介します。小さな凹凸の集合による正方形の立体彫刻は色面の差異によって連続したシリーズをなして、こうした「シークエンス」や「トランスフォーメーション」は、ヘリット・リートフェルト（1888-1964）からマックス・ビル（1908-94）に代表されるウルム造形大学教授陣へ継承された「コンクリート・アート」の流れを組む作品群です。デザイナーとして確かな基礎力を身に着けた吉川は、この立体彫刻によってアーティストとして第一歩を踏み出します。ここから、建築作品や公園も実現しており、建築からデザイン、デザインからアートへと学びを深めた吉川の芸術性は大きく開花していきました。



《r13 11のシークエンスにおける四色の同体積のトランスフォーメーション no. 4》1973-74年



《r14 11のシークエンスにおける四色の同体積のトランスフォーメーション no. 5》1973-74年



《r15 11のシークエンスにおける四色の同体積のトランスフォーメーション no. 6》1973-74年



《r16 11のシークエンスにおける四色の同体積のトランスフォーメーション no. 7》1973-74年



《r17 11のシークエンスにおける四色の同体積のトランスフォーメーション no. 8》1973-74年

## 2 瞬間性と空気感の表現 「色影」

「シークエンス」「トランスフォーメーション」で色面表面の転換と連続性に取り組んだ吉川は、次は、立体彫刻の表面にではなく、凹凸の薄いわずかな側面のみにも色を塗った「色影」というシリーズに取り組んでいきます。ヨゼフ・ミュラー＝ブロックマンと一緒に二人のアトリエで、まるで科学実験を行うかのように微量の絵具を足して調合し、色を塗っていきました。「色影」は角度を変えることで見え方が変わっていく作品です。側面の色が残像となって白い表面を覆って、一瞬一瞬で見え方が移り変わります。伝統的なコンクリート・アートから離れ、瞬間性や空気感をテーマにし始めたシリーズであり、色は光や影、隣り合う色によっても見え方が変わる相対的なものであるという理論に基づいています。



《色影 No. 68》1978-1979年



《r44 色影》1976-1979年



《色影 No. 21》1977年

## 3 対立と空隙の果てしないエネルギー 「宇宙の織りもの」

「色影」で立体彫刻によって色彩の見え方の移り変わりに取り組んだ吉川は、今度は平面のキャンバスによる表現に取り組んでいきます。十文字をモチーフに二つの線が重なる点をぽっかりと穴を開けたような空隙にして、その形を大きくしたり小さくしたりして、白いキャンバスにただただ重ねていくのです。十文字の空隙に挟まれた向い合せになった色彩は、その多くが補色の関係にあります。対立と空隙とを重ねることで、平面でありながら立体性を帯び、内部は果てしない宇宙のようなエネルギーに満ちています。色彩と空隙の緻密な効果によって、キャンバス全体が、神秘の高貴な光に覆われているかのようです。このシリーズは、さまざまな形のキャンバスで展開され、多数のバリエーションが残されています。



《m433 宇宙の織りもの—光りつつ 3)》  
1991-1993年



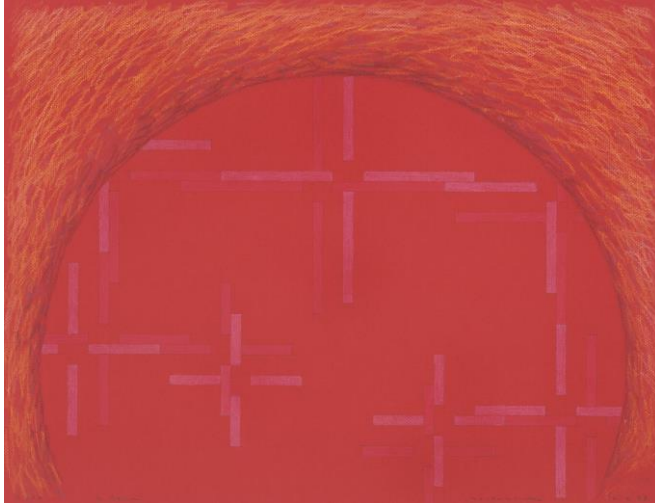
《m454 宇宙の織りもの—流れるように 7)》  
1992-1995年



《m528 宇宙の織りもの—息づく大地 19)》  
1999-2000年

## 4 太陽の生命力 「ローマ」

ヨゼフ・ミュラー＝ブロックマンが万里の長城を旅行中に倒れそのまま帰らぬ人となったのは、吉川静子にとって大きすぎる精神的な痛手でした。二人で暮らした自宅兼アトリエにいるのが耐えられず、3年にわたり、冬の期間はローマに場所を移して滞在制作を行います。ある日、ローマで見た太陽の、燃えるような生命力に感動し再び生きる力をもらった吉川は、これをテーマに再び制作に取り組みます。最初に描いた地平線に沈む赤々とした太陽の姿は、燃えたぎるようです。色彩や表現を変えてさまざまなヴァリエーションが生まれていきました。吉川が受けた太陽の生命力そのものをテーマにした作品から、色彩や宇宙といった、吉川が「宇宙の織りもの」で行ったテーマへの変遷も見られます。



《z606 ローマ》1998年



《z637 ローマ》1999年



《z646 ローマ》1999年

## 5 ルーツといのち 「マイ・シルクロード」 「生命の脈動」

ローマからスイスに戻ってから、吉川はシルクロードをテーマにしたシリーズを制作します。吉川にとってのシルクロードは、ウルム造形大学に入学した際に渡った海の道でした。スエズ運河経由で日本からドイツへ移動した吉川静子が航路で見たコバルトブルーの夜空を背景とした星空、永遠に続く海の水面に宿る光を、「宇宙の織りもの」シリーズの十文字型で表現しています。こうした十文字型のモチーフは「生命の脈動」シリーズでは消え、代わりに軽やかなドットがキャンバスに置かれています。動きを孕んだドットの連続は、「宇宙の織りもの」のような内的エネルギーを帯び、内なる動きと生命力を感じさせます。これまで、宇宙や太陽など自然界のエネルギーをテーマにしてきた吉川は、晩年には、今度は内なる生命力に目を向け、制作を続けたのです。



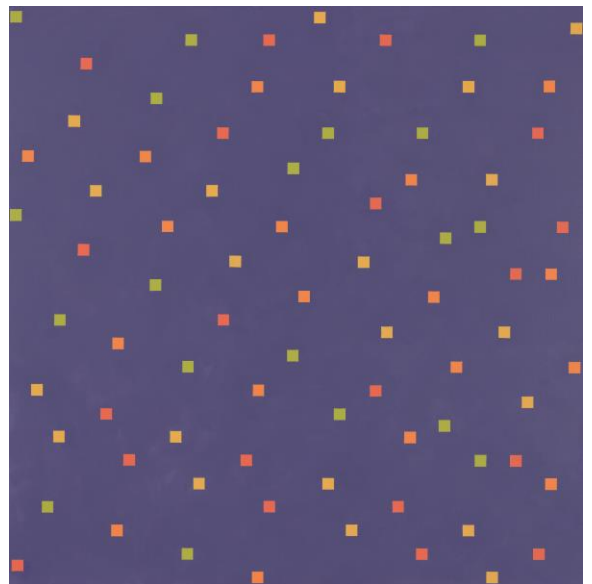
《m688 マイ・シルクロード 54》2005年



《m764 マイ・シルクロード 117》2010/2011年



《m779 生命の脈動 15》2011年



《m780 生命の脈動 16》2011/2012年

## 第2章

# Space In-Between : ヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン

## 1 初期作品 ラッパースヴィールのために

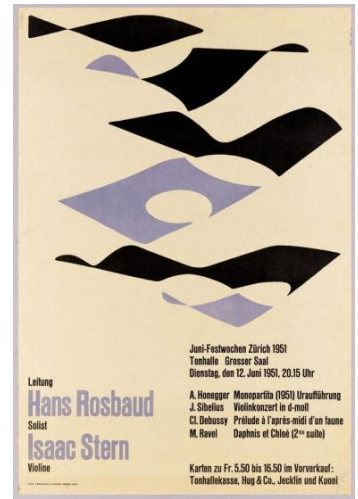
チューリッヒ湖畔の町、ラッパースヴィールに生まれ育ったヨゼフ・ミュラー＝ブロックマンが、バラ庭園で有名な故郷のために制作したポスター他、初期作品を紹介します。キャリアをスタートさせる前には、自画像やスケッチなどの絵を数多く描いていたミュラー＝ブロックマンでしたが、チューリッヒ工科大学で学びデザイナーとして本格的に活動を始めると、画面上にイラストレーションと文字を構成したポスターを制作するようになります。大学の教授陣や同時代のグラフィックデザインからの影響も伺える作品群です。



《ラッパースヴィール》1937年



《スイスの舞台美術展》1949年



《チューリッヒ管弦楽団 6月の祝祭週間コンサート 1951》1951年

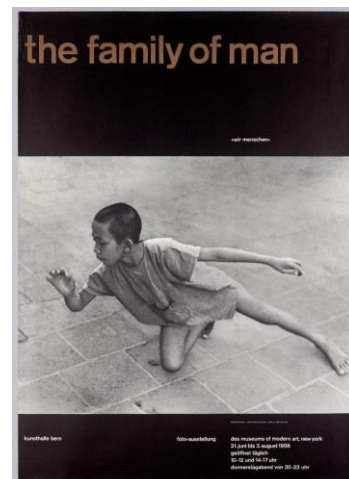
※すべて、大阪中之島美術館蔵, ©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland

## 2 ヴィジュアル・コミュニケーションとフォトコラージュ

ミュラー＝ブロックマンは、先駆的に写真をポスターに取り入れたデザイナーでもありました。スイス自転車クラブのシリーズはその代表的な例です。フォトコラージュによってモチーフの比率を変え、インパクトを与える表現を行っています。1960年代以降のポストモダニズムのデザインにおいては、「ヴィジュアル・コミュニケーション」という言葉がデザインの命題として求められようになりました。デザインはこうであるべきという作り手の思想の確立を希求した時代から、受け手にどのように伝わるかにデザインの命題が移り変わっていく中で、ミュラー＝ブロックマンの作品は、次なる世界的なデザイン潮流の中でお手本となったのです。



《スイス自動車クラブ 子供を守れ!》1953年、  
サントリーポスターコレクション (大阪中之島美術館寄託)  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland



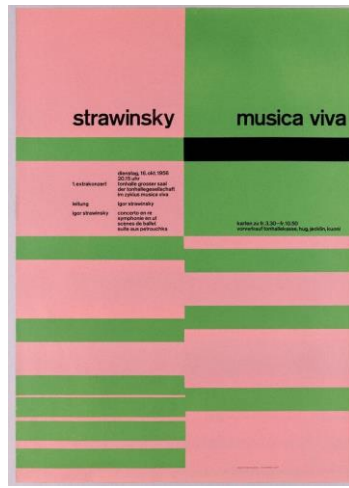
《ザ・ファミリー・オブ・マン》1958年、大阪中之島美術館蔵  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland

### 3 音楽とデザイン

交通事故で不慮の死をとげた最初の妻、フェレーナ・ブロックマンはヴァイオリニストで、チューリッヒ管弦楽団ほかチューリッヒのいくつかの楽団に属す音楽家でした。こうして音楽への道に導かれたミュラー＝ブロックマンは生涯にわたって多数のコンサートのポスターを手掛けています。中でも「ベートーベン」のポスターは、日本でも1958年『アイデア』誌に紹介された代表作です。「ムジカ・ヴィヴァ」シリーズにおいては、グリッドシステムのさまざまなバリエーションとタイポグラフィとに絶妙な色彩感覚が重なり、音楽ポスターにふさわしい豊かなハーモニーが奏でられています。



《第4回特別コンサート ベートーベン》  
1955年、個人蔵（スイス）  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland



《ムジカ・ヴィヴァ ストラヴィンスキーのコンサート》  
1956年、大阪中之島美術館蔵  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland



《チューリッヒ管弦楽団 ムジカ・ヴィヴァ・コンサート 1972》  
1972年、大阪中之島美術館蔵  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland

### 4 グリッドシステム

タイポグラフィ、イラストレーション、写真をどのように紙面上に構成するかということについては、1920年代以降ヨーロッパのデザイナー、芸術家を中心にさまざまに試み、提唱、実践されてきました。ミュラー＝ブロックマンはこうした構成の流れをまとめると共に、空間や地理をも含むさまざまな実践の例を交えつつ、『グリッドシステム』（1981年初版）とし理論書をまとめています。「ノイエ・グラフィック」誌は、グリッドシステムが実践された、ミュラー＝ブロックマン他による雑誌です。多言語による文字組と写真の緻密な構成の紙面は、模範的なグリッドシステムによるものでした。



《チューリッヒ美術館 コレクション展》  
1953年、大阪中之島美術館蔵  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland



《フィデリオ》1960年頃、大阪中之島美術館蔵  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland



《ムジカ・ヴィヴァ 1970》1970年、  
大阪中之島美術館蔵  
©Museum für Gestaltung Zurich, Switzerland



## 展覧会公式図録

B5版136頁、23.9×18.8cm

執筆者：井口壽乃（埼玉大学名誉教授）、白井敬尚（グラフィックデザイナー、武蔵野美術大学教授）、  
ラス・ミュラー（Lars Müller Publishers主宰／吉川静子とヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン  
財団理事長）、ガブリエル・シャード（美術史・建築史家／チューリッヒ工科大学講師／吉川静子と  
ヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン財団理事）、平井直子（大阪中之島美術館主任学芸員）



日)

チューリッヒにて 1975 年頃

Copyright and courtesy of the Shizuko Yoshikawa and Josef Müller-Brockmann Foundation

英)

*in Zurich, c.1975*

Copyright and courtesy of the Shizuko Yoshikawa and Josef Müller-Brockmann Foundation

### 《 報道関係者お問い合わせ先 》

「Space In-Between : 吉川静子とヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン」PR事務局（TMオフィス内）

担当：馬場・永井・西坂

TEL : 090-6065-0063 (馬場) 090-5667-3041 (永井)

テレフォンセンター : 050-1807-2919 FAX : 06-6231-4440 E-MAIL : [SIB@tm-office.co.jp](mailto:SIB@tm-office.co.jp)